

平成18年度卒業論文

イスタンブールにおける聖者とその聖者性

指導教官 林 佳世子

学籍番号 8503061

南・西アジア課程 トルコ語専攻

岩根匡宏

目次

はじめに	2
1. 聖者・聖者崇拜	2
2. 先行研究と問題の所在、研究の意義	4
3. İstanbul Evliyalari ve Fetih Şehidleri	6
第1章 イスタンブールにおける聖者の特徴・傾向	8
1. イスラームにおけるイスタンブールの位置づけ	8
2. 方法	9
3. 統計結果	10
(a) 男女比	
(b) 時代	
(c) 聖者廟の分布	
(d) 教団	
(e) 聖者性の所在	
第2章 イスタンブールにおける聖者の聖者性	22
1. イスタンブール征服への参加	22
2. 奇跡	26
3. イスラームへの貢献	32
4. その他	37
おわりに	40
参考文献一覧	42

はじめに

1. 聖者・聖者崇拜

「聖者」とは、一般的には、日常領域と非日常領域の境界線に立つ両義的存在の一種とされている¹。

イスラームにおいて「聖者」とは、アラビア語における「ワリー (wali)」²またはその複数形である「アウリヤー (awliya)」³に相当する語である⁴。ワリーの訳としては、神の友、あるいは神に近い者という日本語が当てはまるだろう。これは本来聖者と関係があるわけではなく、信仰の正しいムスリムを意味していたのだが、スーフィズムの発展や展開を経てスーフィーの理想の具現者を表すようになった。神との合一を体験し、自我の束縛から解放された、つまり、もはや「私」が存在しないスーフィーにとって、その先にあるものは、利他行であった。すなわち悩める民衆を精神的、物質的に救済するための無償の奉仕である。したがってスーフィズムという文脈においてイスラームの聖者とは、神に近い人間として神と人間との仲介者となり、罪の赦し、救い、現世利益などについて神へとりなしを行う者であったのである。スーフィズムが民衆化するにつれ、聖者という概念も彼らに浸透していき、ワリー概念が大多数の人間とは異なる特別の性質を意味するようになるなど、少しずつ変質していった。その結果、信仰や生活態度によって大多数の人々から尊敬を受けるような人物を表すようになったという⁵。

キリスト教では、「列聖⁶」と呼ばれているように聖者を公的に認知する手続きが存在していたが、イスラームにはそれが存在しなかった。ある集団が聖者と認識すれば、その者は聖者となるのである。それもイスラームにおける聖者

1 赤堀雅幸「聖者信仰研究の最前線—人類学を中心に」、赤堀雅幸・東長靖・堀川徹編『イスラーム地域研究叢書7 イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会、2005、26頁

2 トルコ語の“veli”に相当する。

3 トルコ語の“evliya”に相当する。

4 本論文ではサーリフ（信仰正しき者）やサフィー（親しき友）などの用語は適用せず、ワリーのみを適用する。

5 私市正年『イスラーム聖者 奇跡・予言・癒しの世界』講談社現代新書、1996、43～45頁

6 キリスト教において聖者の認定は大抵死後に行われるが、イスラームにおいては生前から聖者として認められている者も存在する。

の大きな特徴であろう⁷。

さて、神と人間との仲介者である聖者であるが、その聖性はどこから生まれるのか。それは罪の赦し、救い、現世利益などのとりなしを行う際の「奇跡⁸」であった。病気の治癒、雨乞い、空中浮遊などとして現れる奇跡によって人々はその聖性を感じ、彼を聖者として認識すると同時に信仰、崇拝するようになったのである⁹。その聖性は、バラカという用語で表される¹⁰。バラカは、聖者の墓、生きている聖者、スルタンや裁判官、聖者の母親や子供（血によるバラカ伝授）、一族や集団に属するバラカ、コーランやハディースの書、墓地やモスク、聖者の手や身体、衣服、聖者の触れた飲み物、聖者が使用した鎌、果樹、王朝、都市、船、日付や人名などあらゆるものに宿り得るものであり、それは時代が下るにつれ、大衆化していくこととなる。大衆化の結果、バラカを持つ師¹¹の寝間着を洗った後の汚水を飲んでバラカを吸収するという行いまで見られたという¹²。こうしたバラカの大衆化は、民間の伝承や観念という形で今日まで存続しており、聖者伝としても残されてきた¹³。そしてバラカの大衆化により、聖者や聖者崇拝も民衆に浸透していったのだ。

聖者崇拝はイスラームが世界中へ拡大してゆく過程において、二重の意味で決定的な役割を担っていたとされている。まず第一に、上述のように聖者たちが民衆にわかりやすい形でイスラームを体現し大量改宗へと導いたといわれる側面であり、第二にすでにイスラーム化した地域において、結果としてそれ以前の在来諸宗教における聖者崇敬的な要素をイスラームへ注入することになった一方で、それと密接に結びついた形に変化したイスラームを当該社会の深部にまで浸透させた側面である¹⁴。

7世紀初頭にアッラーの啓示を受けたムハンマドによって提唱され、コーラン、ハディース、シャリーアを基に主にウラマーたちによって洗練、継承されてきたものを正統イスラームとするならば、聖者崇拝は、それとは対極に位置

⁷ 同上、52頁

⁸ トルコ語では、“keramet”の語に相当する。

⁹ 私市、前掲書 53頁

¹⁰ バラカは「神の祝福・恩寵・御利益」などと訳され、聖者はそのバラカを神から授けられている者として理解されている。

¹¹ 17世紀モロッコの聖者ユージーであり、当時彼は天然痘を患っていたとされている。

¹² 私市、前掲書、73頁

¹³ 同上、72-73頁

¹⁴ 大稔哲也「イスラーム世界の参詣—聖者とスーフイズムを視野に入れつつ—」、『岩波講座 世界歴史10 イスラーム世界の発展』 岩波書店、1999、150頁

するものであろう。聖者崇拝に対する批判的な意見¹⁵も数多く聞かれるが、この事象がイスラームにあげてきた貢献は、非常に大きなものであり、決して無視できるものではない。

2. 先行研究と問題の所在、研究の意義

それでは、聖者や聖者崇拝に関連して、これまでどのような研究の枠組みが可能であったのであろうか¹⁶。

まずは、理念上の「聖者論」そのものである。主に宗教学、哲学、イスラーム学の側からの研究に加え、ガザーリー¹⁷などの聖者理論そのものが問い直されてきた。これに関連して、聖者と不可分の関係にあり、逆に聖者の性質を規定しうるカラーマ（奇跡、美質）の研究も盛んに行われてきた¹⁸。しかし、それ以外の分野の研究は遅れているとされている。

第二に、聖者崇拝が現象として現れる諸相の検討が挙げられる。マウリド（聖者聖誕祭）、ズィヤーラ（聖墓参詣）、ハドドラ、ズィクル（唱名を伴った集会および踊りの集い）などがこれに該当する。マウリドは普通、聖者廟への参詣と墓周囲の巡回、廟周辺へのさまざまな出店、タリーカ¹⁹による行進、ズィクルなどを伴い、これらを含めた考察には、いくつか研究²⁰がなされている。ズィヤーラは、聖者崇拝が目に見える形で現れる重要な契機であり、墓でのコーラン読誦、祈願、願掛けと供物などを包含している。従来ズィヤーラは、シーア派イランのものが強調される傾向にあったが、大稔²¹がスンナ派エジプト社会においても歴史的に重要な役割を担っていたことを、参詣慣行をもとに掘り起こしている。

¹⁵ その代表的なものが、「一神教としてのイスラームにおける、在るべき姿からの逸脱」というものである。第二節でも触れる。

¹⁶ これまでの先行研究、成果については、大稔哲也「「聖者」と「聖者崇拝」」三浦徹、東長靖、黒木英充編『講座イスラーム世界 別巻 イスラーム研究ハンドブック』栄光教育文化研究所、1995、240～243頁を参照した。

¹⁷ 主として11世紀後半に活躍したスーフィー、思想家。

¹⁸ Gramlich, R., *Die Wunder der Freunde Gottes*, Wiesbaden, 1987. がその代表例である。大稔、前掲論文、242頁

¹⁹ スーフィー教団。

²⁰ Reeves, E.B., *The Hidden Government*, Salt Lake City, 1990. などがある。

²¹ 大稔哲也「エジプト死者の街における聖墓参詣—12-15世紀の参詣慣行と参詣者の意識」『史学雑誌』102/10、1993において。

だがこれらの慣行については、イスラーム初期から今日に至るまで常に批判が生じていた。代表的論客としては、イブン・タイミーヤ²²が挙げられる。この問題は単にイスラームを超えて、中東地域における一神教の恒常的な復興運動、在るべき姿からの逸脱に対する異議申し立てとして捉えることも可能であるという²³。

第三の問題設定としては、聖者と社会関係・秩序や政治が挙げられる。これは現在最も研究が進行し成果をあげつつある分野である。この枠組みの中には聖者と共同体、聖者と部族、政治と都市形成、聖者、聖者廟と社会の関係、タリーカ（スーフィー教団）の問題を含めることができよう。まず聖者と社会秩序・政治に関しては、マグリブ研究²⁴がその先鋭的問題提起によって他地域を凌駕している。植民地支配と聖者の関係については、中央アジアにおける蜂起の核としての聖者について歴史の側からのアプローチが見られる²⁵。

一方、聖者とその磁場について考えるとき、聖者廟やスーフィー修道場などが着目されることとなる。「聖所」の規模、場所、起源を分類検討した研究²⁶や、インドにおけるドイツ、フランスを中心に、修道場などの遺跡の修復とワクフ文書などの歴史資料を組み合わせたスタイルによる研究²⁷などがあり、これらは次々に成果を生んでいる。さらに、聖者廟などとそれを取り巻く社会研究もマグリブを中心に層が厚く、聖者廟と都市の問題はそのまま都市形成の問題にもつながってゆく²⁸。

さて、私が本稿で扱うのはイスタンブールに墓をもつ聖者たちである。上述の3つの問題設定の枠組みの中では、第二のテーマに属することになるだろう。資料としては聖者伝集を用いる。従来イスラームの歴史研究では、年代記は事実に基づく記録であり、年代記の資料批判による研究が重視されてきた。一方聖者伝は、ほとんどが架空の記録とされ、歴史資料として用いることは邪道とされた²⁹。こうした考えに反対し「聖者伝は架空の話ばかりではなく、実は年

²² 13～14世紀に活躍したイスラーム法学者。

²³ 大稔、前掲論文、242頁

²⁴ Gellner, E., *Saints of the Atlas*, London, 1969. や、Eickelman, D.F., *Moroccan Islam*, Austin, 1976. などを挙げている。

²⁵ 小松久男「タシュケントのイシャーニについて」『イスラム世界』23・24, 1985. において

²⁶ 上岡弘二「シーア信仰雑感」『アジア・アフリカ通信』46, 1985. など

²⁷ 荒松雄『インド史におけるイスラム聖廟』東京大学東洋文化研究所, 1977. など

²⁸ 羽田正「「牧地都市」と「墓廟都市」—東方イスラム世界における遊牧政策と都市建設」『東洋史研究』49/1, 1990. がその例である。

²⁹ 私市、前掲書、38,39頁

代記に出てこないたくさんの方の史実を伝えている。そればかりか、架空の話を生み出す力（政治や社会による虚構化の力）が働いていることは紛れもない事実である。少なくともこの二つだけでも、聖者伝は歴史資料になりうると思う」という私市の言葉³⁰があるが、たとえ聖者伝が事実に基づかない架空の記録だとしても、それを研究することで、当時の人々の生活の様子はもちろんのこと、聖者が生まれるまでの過程、聖者として人々に認められるためには一体何が必要であったのか、つまりその聖者の聖者性が見えてくるのではないだろうか。そこで、本稿では、シェヴケット・ギュレル（Şevket Gürel）が執筆し、イスタンブール歴史的霊廟・礼拝所復興財団（İstanbul'daki Tarihi Türbe ve Mescidleri İmam Vakfı）によって 1988 年に出版された *İstanbul Evliyaları ve Fetih Şehidleri*（『イスタンブールの聖者と征服³¹の殉教者たち』）を扱うことにした。この文献については次節で述べるが、イスタンブールにその墓がある聖者たちについての記録である。この文献を手がかりに研究することによって、イスタンブールという特定の都市でどのような人物が聖者として記憶され、参詣の対象となっていたのかを明らかにしたい。特に、この地域における聖者の起こした数々の奇跡を見ていくことを通じて、この地域の聖者たちの聖者性が明らかになるのではないかと考えている。

3. *İstanbul Evliyaları ve Fetih Şehidleri*

本稿で資料として扱う『イスタンブールの聖者と征服の殉教者たち』は、第二節でも触れたように、シェヴケット・ギュレルが執筆し、イスタンブール歴史的霊廟・礼拝所復興財団によって 1988 年に出版された聖者伝集である。これは、トルコ各地にある聖者廟とその聖者の生涯を描いた様々な伝記集³²から、イスタンブールのもののみを抽出し編纂したもので、初めにサハーベ³³35 人、そして次にその他の聖者 174 人について述べられている。トルコのムスリムたちが聖者参詣する際のガイド的な役割も果たしていると言っているだろう。

³⁰ 同上、16 頁

³¹ 本論文で扱うのは主に 1453 年のイスタンブール征服である。

³² その中でも、サハーベを扱った A.Süheyl Ünver, *İstanbul'da Sahabe Kabirleri*, İstanbul Fethi Derneği Yayınları, 1953 は有名である。

³³ サハーベについては、第一章第一節で述べる。

本稿では、後半の 174 人の聖者について扱う。というのは、サハーベたちの聖者性の特徴は明らかであるためである。彼らの詳細な特徴、そしてそれぞれの生涯を知ることは重要なことだが、今回はそれを除いた上で、この地域の聖者の聖者性を明らかにしようと考えている。

第一章では、資料に掲載されている 174 人の聖者について、男女比、時代、聖者廟の分布、教団、聖者性の所在という 5 つの観点から統計をとり、その結果と分析を述べる。第二章では、第一章で統計をとった 5 点のうち、聖者性について 3 つのカテゴリー³⁴に分類し明らかにしていく。その際資料として、『イスタンブールの聖者と征服の殉教者たち』に掲載された聖者のうちの 15 例を翻訳し、事例として紹介する。

³⁴ この 3 カテゴリーに該当しなかった聖者は、その他として紹介する。

第1章 イスタンブールにおける聖者の特徴・傾向

1. イスラームにおけるイスタンブール³⁵の位置づけ³⁶

イスラームの勃興以来、対峙するビザンツ帝国の都コンスタンティノープルの征服はムスリムの目標の一つであり、このため、それに向かう人々を鼓舞するための宗教的な動機付けが積極的に行われてきた。すなわち、イスタンブールは預言者ムハンマドのものだというハディースがあり、この都市自体に聖性があるとする考えである。このことに支えられ、ムスリムたちは8世紀以上にもわたってイスタンブールを征服しようと遠征、包囲を繰り返していた。

まず、ウマイヤ朝期に4回、アッバース朝期には1回のイスタンブール遠征が行われた。ウマイヤ朝期の初めの3回はムアーウィアの時代、4回目はスレイマン・イブン・アブドゥルマリクの時代である。アッバース朝期の1回は第三代カリフのマフディの時代に始まっている。この5回の遠征は、655年から782年の間に行われている。

この時代においてイスタンブールに強い聖性を付加するのが、サハーベ(sahabe)たちの墓の存在だ。サハーベとは、ムハンマドの教友である。その一部が当時ビザンツ帝国の首都であったイスタンブールを征服すべく遠征し、シャヒード³⁷となった。サハーベの墓がイスタンブールにあることは、後述のメフメト2世の征服後、町をイスラーム化する上で役に立った。また、多くのムスリムがムハンマドとの精神的なつながりを求め、現在でもサハーベ廟を訪れる者は後を絶たない³⁸。このサハーベ廟が多く存在することで、イスタンブールは聖地としての性格を強めていったのだ³⁹。

オスマン朝期には、イスタンブールは7回包囲された。その7回のうち最後の包囲が1453年に行われ、それを指揮したのがメフメト2世である。彼は若干21歳でありながら53日でイスタンブールを手中にした。そしてこの1453年のイスタンブール征服に参加した者は大きな尊敬の対象となり、“Ni'm-el

³⁵ メフメト2世による征服以前の名称はコンスタンティノープルとされているが、本論文ではトルコ語の原文に倣ってイスタンブールとする。

³⁶ 本節では、A. Süheyl Ünver, *İstanbul'da Sahabe Kabirleri*, İstanbul Fethi Derneği Yayınları, 1953, v-vi, 7頁を参照した。

³⁷ 殉教者を指す。トルコ語の”şehid”に相当する。

³⁸ H. Necdet İşli, “Sahabe” *Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi Cilt 6*, Tarih Vakfı, 1994, p405.

³⁹ A. Süheyl Ünver、前掲書、VI頁

Ceyş”（「幸福な軍人」）として葬られたのである。しかし、それ以前に行われた包囲に参加した者たちも、アッラーやムハンマドによる慈悲を“Ni'm-el Ceyş”と同じように受ける資格があるとされている。というのは、上で述べたハディースの存在が、ムスリムによるイスタンブール遠征、そして包囲、征服に対して多大な影響をもたらしており、ムハンマドへ喜ばしい知らせ⁴⁰を届けることは大きな成功であると考えられたからである。

1953年、イスタンブール征服500周年に関連してキャンペーンが展開され、そこでは征服に至るまでのサハーベや軍人たちを永遠に忘れない、という言葉がスローガンとして掲げられた⁴¹。トルコ国内では、この都市と征服までの過程、シャヒードを誇りに思う者が多く、「イスタンブールは永遠に私たちのものだ」と声を大にして主張するほどの愛情をもってこの都市に接している⁴²。その際の根拠となっているのが、ムハンマドのハディースやサハーベ廟の存在、また、これから見ていく多くのイスラーム聖者の存在なのである。

2. 方法

さて、イスタンブールではサハーベ以外にどのような人々が聖者として参詣の対象となっていたのだろうか。イスタンブールにおける聖者たちの特徴や傾向を知るために、『イスタンブールの聖者と征服の殉教者たち』を用い、その中に記述された174人の聖者⁴³の統計をとることにする。男女比、時代、聖者廟の分布、教団、そしてその聖者性という5点についての統計をとり、それぞれの分析を加えたい。さらに、聖者性については、2章で事例を出し、より詳細に分析する。

⁴⁰ ここでは、イスタンブール遠征に参加し、結果この都市を手に入れること。

⁴¹ A. Süheyl Ünver, *İstanbul'da Sahabe Kabirleri*, İstanbul Fethi Derneği Yayınları, 1953, v 頁

⁴² だが、ギリシャ人との間で「イスタンブールは誰の都市か」という論争は絶えず、現在でも続いている。

⁴³ 同文献内で、一箇所にまとめられている複数の聖者も数に含める。また、著者が son söz でとりあげている Şehid Mehmed Efendi は、巻末の聖者廟リストに掲載されていないため、含めないこととする。

3. 統計結果⁴⁴

(a) 男女比

	人数	割合
男性	172	98,9%
女性	2	1,1%

女性はチフテ・ゲリンレル⁴⁵のうちの 1 人、そしてロフサ・スルタン⁴⁶の 2 名しか確認することができなかった。さらにチフテ・ゲリンレルについては、明確な聖者としての要素さえ確認が不可能なので、この地域における女性の聖者性というものをここでははっきりと示すことはできないのではないかと感じる。さらに、男性の聖者の場合は、ほとんどの場合男性であると記述されていないにもかかわらず、この 2 人ははっきりと女性であると記載されていることから分かるように、女性の聖者というものは珍しい存在であったのであろう。

共通点としては、参詣者として女性を対象としていることが挙げられるだろう。チフテ・ゲリンレル廟は妊娠している女性⁴⁷、ロフサ・スルタン廟は「子どもがいない女性たちが彼女の墓を訪れ願を掛けると、すぐにその願いが実現する」とあるように、子どもを望む女性が参詣しているという記述が見られる。ただしこのことは、女性の参詣者が女性の聖者廟のみを訪れているということではない。女性たちは男性の聖者廟にも積極的に訪れており、むしろ参詣者として男女の区別はないといった方が正確である。

⁴⁴ ここからは、*İstanbul Evliyaları ve Fetih Şehidleri* のページ数も載せていく。

⁴⁵ 110 頁

⁴⁶ 156 頁、2 章に掲載。

⁴⁷ 他に生活の安らぎを求める者、試験を控えた学生、病気の者、旅行に出ようとしている者、求職者なども参詣している。

(b) 時代⁴⁸

	人数	割合
12 世紀	1	0,57%
13 世紀	1	0,57%
14 世紀	2	1,15%
15 世紀	21	12,07%
16 世紀	20	11,50%
17 世紀	15	8,62%
18 世紀	14	8,05%
19 世紀	6	3,45%
20 世紀	6	3,45%
記述なし	88	50,57%

『イスタンブールの聖者と征服の殉教者たち』に掲載されている聖者で、生没年が記載されている者が生きた時代のうち、圧倒的に多かったものは、15 世紀と 16 世紀であった。

15 世紀については、この地域に特有である、イスタンブール征服が関係しているだろう。1453 年の、メフメト 2 世によるイスタンブール征服に参加した聖者が多く存在することがこの地域における大きな特徴であることから⁴⁹、15 世紀に生きた聖者の数が多いことは必然のように思われる。「記述なし」に区分されている聖者の中にも、イスタンブール征服に参加したとされる聖者が数多く掲載されているため⁵⁰、それも含めると、この時代の聖者はさらに増えるこ

⁴⁸ 生年が世紀を跨っている場合は、没年の世紀に区分した。

⁴⁹ (e) 項を参照されたい。

⁵⁰ 生没年の記述がなく、イスタンブール征服に参加したとされる聖者は 48 人であった。

とになろう。

また、15世紀に迫るほどの人数である16世紀の聖者は、ほとんどがスーフィー教団に属しシャイフ⁵¹やハリーファ⁵²職を行っているか、奇跡を見せた人物であった。この時期の聖者の中でイスタンブール征服に参加した者はババ・ユスフ⁵³の一人である。そのババ・ユスフでさえ、

シャリーアに忠実で、神の道をよく知っていた。

バヤズィト・モスクにおける初めての説教を行った。聞いていたスルタンや聴衆たちは、この説教に酔ってさえいた。さらに何人かの非ムスリムをもムスリムにしてしまったのだ。

という記述が見られるように、むしろその方面の活躍が聖者性として描かれているように感じる。

一方で、12世紀に生きたアブドゥッラー・カシュガリー⁵⁴、13世紀に生きたフェイズラー・エフェンディ⁵⁵、14世紀のカラジャ・アフメト・スルタン⁵⁶、キョペッキチ・ハサン・ババ⁵⁷はそれぞれ、ナクシュバンディー教団に属する人物、ウラマーであり、奇跡を起こした人物、医学や精神世界学問に貢献した人物、動物を愛した人物であり、15世紀に多く見られる聖者とはその性質を異にしていることがはっきり見て取れる。

さらに、他の年代の聖者を見ても、イスラームへの貢献⁵⁸を行った聖者や奇跡を行った聖者の2通りしかおらず、イスタンブール征服以外のジハードに参加したという記述の見られる聖者はバルバロス・ハイレッディン⁵⁹、セイイド・メフメト・ハイダル・デデ⁶⁰、ミーマール・シナン⁶¹の3例のみであることから、15世紀の聖者の特異性が明らかとなるであろう。

他の年代の中で、最後に目をつけておきたいのは、20世紀の聖者である。この時期にも、奇跡を起こした聖者というものが2例ながらはっきりと記述され

⁵¹ スーフィーの師、スーフィー教団全体の長、個々の修行場の長（赤堀雅幸「シャイフ」大塚和夫 小杉泰 小松久男 東長靖 羽田正 山内昌之編『岩波 イスラーム辞典』岩波書店、2002、446頁）

⁵² シャイフの代理人（小杉泰「ハリーファ」大塚和夫 小杉泰 小松久男 東長靖 羽田正 山内昌之編『岩波 イスラーム辞典』岩波書店、2002、787頁）

⁵³ 99頁

⁵⁴ 69頁

⁵⁵ 120頁

⁵⁶ 143頁

⁵⁷ 151頁

⁵⁸ (e)項を参照されたい。

⁵⁹ 101頁、2章に掲載。

⁶⁰ 114頁

⁶¹ 166頁、2章に掲載。

ていた。この年代の聖者であるアブデュルカディル・ベルヒー⁶²は、アディレ・スルタン⁶³が自身を訪問することを予言し、彼を迎えるという奇跡を起こしている。このことからわかるように、聖者や彼らの起こす奇跡というものは過去の存在などではなく、現在進行形の事象なのである。

⁶² 76 頁

⁶³ この時代に禁欲生活などの苦行を徹底して、高い地位に到達したスーフイー

(c) 聖者廟の分布

イスラームにおいて、聖者廟は宗教的、教育的機能を有していた。都市であれ、農村であれ、多くの聖者廟には礼拝や教育の施設、宿泊施設が備わっていた。その点において聖者廟は、モスクやマドラサと本質的な違いはないといえる。聖者廟には、聖者や聖者を慕う信徒たちが集まり、その中には女性も含まれていた。そこでは、礼拝やコーランの読唱、集団祈祷が行われ、それには歌や踊りも伴っている。師弟の出会いや師による教育もここで行われるなど、聖者廟は民衆にとって多大な意味を持つものなのである⁶⁴。よって、聖者廟の分布を調べることで、聖者たちの活動していた範囲やこの地域の当時の様子を垣間見ることができるのではないだろうか。

そこで、この地域において聖者廟の分布がどのようなになっているかを調べていきたい。ここでは、イスタンブールを4つの地域に区分して分布を見ていくことにする⁶⁵。

	人数	割合
城壁内	84	48,28%
城壁外 ⁶⁶	53	30,46%
ガラタ側	24	13,80%
アジア側	13	7,48%

まず目を引くのは旧市街、特に城壁内に聖者廟が多いことであろう。これは、イスタンブールという都市の性格上、イスタンブール征服に参加した聖者が多いことに由来していると言っても間違いではないだろう。特に征服においてシャヒードとなった者は、シャヒードとなった場所に埋葬されることが多い。逆にガラタ側に埋葬されており、イスタンブール征服に参加した聖者はトゥズ・

⁶⁴ 私市 前掲書 186、187 頁

⁶⁵ 旧市街を城壁内と城壁外、そしてガラタ側とアジア側の4地域に区分する。

⁶⁶ Edirnekapı、Egirkapı、Silivrikapı、Mevlanakapı は城壁外に含めた。

ババ⁶⁷、サル・エル⁶⁸、テッリ・ババ⁶⁹の 3 人、アジア側に埋葬されている同様の聖者はアク・ババ・スルタン⁷⁰、サル・カドゥ⁷¹の 2 人だけである。この事実も、上の分析を裏付けているのではないだろうか。

さらに、旧市街が他の 2 地域より都市部であったことが、この理由として挙げられる。栄えており人口の多い地域には、聖者もそれだけ多く存在するということができるであろう。

ただ、この文献に掲載されている聖者はイスタンブールの聖者の一部でしかなく、この聖者らを知ることは、この地域の聖者の全てを知ることはないということも付け加える必要がある。

⁶⁷ 212 頁、2 章に掲載。

⁶⁸ 193 頁

⁶⁹ 209 頁

⁷⁰ 83 頁

⁷¹ 193 頁

(d) 教団⁷²

教団	人数	割合
ハルヴェティー教団	13	7,47%
バイラミー教団	13	7,47%
ナクシュバンディー教団	9	5,17%
カーディリー教団	4	2,30%
メヴレヴィー教団	5	2,87%
複数教団 ⁷³	3	1,72%
その他の教団 ⁷⁴	9	5,17%
不明 ⁷⁵	8	4,60%
記述なし	110	63,22%

まず、教団に関する記述のなかった聖者が 110 人と、記述のある聖者の人数を超えてしまい、ここで分析できる聖者が全体の 40%弱になってしまったことから、スーフィー教団には属さず、イスタンブール征服に軍人として参加した聖者が多いことが伺える。ただ「聖者」という概念が、スーフィズムに端を発していることを考慮すると、記述のない聖者のうち、決して無視のできない数がいずれかの教団に属していたと思われる。しかし裏を返せば、この地域における聖者のうち、ほぼ 3 人に 1 人がスーフィー教団に属していたことが明らか

⁷² スムビュリー教団、ジハンギリ教団、ラマザニー教団、シエムスイエ教団、スィナーニー教団はハルヴェティー教団に、ジェルヴェティー教団、メラミー教団はバイラミー教団に含めた。

⁷³ 複数のタリーカでシャイフやハリーファ職を行っており、かつ、属した教団名が書かれていない者をここに分類した。

⁷⁴ セラーミー教団、キューブレヴィー教団、ヴェイスィー教団、ルフアーイー教団、ゼイニー教団をその他に分類した。

⁷⁵ ある人物のテッケに属するという記述しか見られず、そのテッケを特定できない場合を不明とした。

であるといえるであろう。

ここで注目すべき点は、トルコにおけるタリーカの分布とは一致していないということであろう。歴史的にトルコで大きいとされている教団はナクシュバンディー教団であり、トルコ人のタリーカに対する理解はこのナクシュバンディー教団のものであるとさえ言われることもあるが、ここではハルヴェティー教団、バイラミー教団に次ぐ3番手となっている。ナクシュバンディー教団に次ぐ教団であると考えられるベクタシー教団にいたっては、1例も存在しなかった。この表からは、イスタンブールにおける聖者には教団という観点で大きな偏りはなく、それぞれの教団にある程度の数の聖者が存在していたということがわかる。つまり、この地域におけるタリーカの勢力はトルコ国内のものとは異なり、拮抗しているということである。イスタンブールが都市部であり、さまざまなタリーカの本拠があることを考えると、この事実は当然の結果であるのかもしれない。

また、複数の教団に属していたと分類されている聖者が3例ある。スーフィー教団は種類という面で非常に数が多いが、起源を共にしている教団も多数存在し、排他的な性格は有していないと言っても過言ではない。よって、教団から教団へと渡り歩くという事例は稀なことではないといえる。また、この表で示されているようないわゆる大教団だけではなく、マイナーともいえる教団がイスタンブールに本拠を置くことも多かったことから考えても、教団間の移動は頻繁に行われていたことなのである。

次に、(c) 項の「聖者廟の分布」と関連して、教団ごとの聖者廟の分布を見ていく。

教団 ⁷⁶	城壁内	城壁外	ガラタ側	アジア側
ハルヴェティー教団	5	6	2	0
バイラミー教団	7	0	3	3
ナクシュバンディー教団	4	3	1	1
カーディリー教団	3	0	1	0
メヴレヴィー教団	0	4	1	0

⁷⁶ ここでは、上位5教団に限定する。また、分派などの分類は注72に倣う。

まず目を引くのが、ハルヴェティー教団である。城壁内と城壁外の旧市街に 11 人と、全体の 84,61%を占めていた。逆にガラタ側、アジア側にはほとんど聖者廟が存在せず、このタリーカの活動は旧市街で重点的に行われていたことが伺える。ナクシュバンディー、カーディリー、メヴレヴィー教団もハルヴェティー教団と類似した傾向を持っているとっていいだろう。

それに対しバイラミー教団は、ガラタ側、アジア側ともに 3 人と、他の教団の活動が薄かった地域へも積極的に進出している。

以上の結果から、旧市街で圧倒的な勢力を誇っていたハルヴェティー教団、それに続くナクシュバンディー教団、逆に他の教団の勢力が弱かったガラタ側とアジア側での活動を重視し、この地域で他を突き放しての一番手になりながら、旧市街での活動もある程度行っているバイラミー教団という図式が出来上がる。必然的に民衆内の教団分布もこのようなものとなっていたのではないだろうか。

(e) 聖者性の所在

聖者性 ⁷⁷	人数	割合
イスタンブール征服への参加 ⁷⁸	72	41,38%
奇跡 ⁷⁹	31	17,81%
イスラームへの貢献 ⁸⁰	53	30,46%
その他	10	5,75%
記述なし	8	4,60%

聖者性の所在としては、イスタンブール征服への参加、奇跡、イスラームへの貢献という3点におおきく分類することができた。それぞれの詳細は第二章に掲載したそれぞれの聖者伝を通じて見ていき、ここではおおまかな特徴を述べていくことにする。

まずこの中でも際立っているのは、全体の40%を超えているイスタンブール征服に参加した聖者である。この地域の聖者性の最も大きな特徴は、ジハード（ここではイスタンブール征服）への参加の割合が非常に大きいことであるといってもいいだろう。また、ここに分類した72名のうち、シャヒードになった者が23名であることから考察すると、聖者として崇められるために、必ずしも殉教しなければならないわけではなく、参加それ自体に重要な意味が含まれているということが確認できる。

第二に、奇跡を行った聖者も多く存在していることがわかる。奇跡の内容としては主に、予言や物質の変換の2つがあり、他には夢におけるムハンマドからのお告げ、空間の移動、病気の治癒や死後の奇跡などが挙げられる。民衆にも理解される形での聖者性の出現として、奇跡が大きな意味を有していたこと

⁷⁷この表においては優先順位を1.イスタンブール征服への参加、2.奇跡、3.イスラームへの貢献とし、聖者性が複数見受けられた者についてはこの優先順位に則って分類した。また、彼らについては次頁で述べる。

⁷⁸ 明確な記述はないが、征服に参加したと思われる者7人を含む。

⁷⁹ ここでは、聖者性として奇跡のみが見受けられる者をここに分類する。

⁸⁰ 注2と同様に、ここではイスラームへの貢献のみが見受けられる者をここに分類する。また、シャイフやハリーファ職、あるいはスーフィーとして活躍した聖者をここに分類した。

がイスラームにおける聖者の1つの特徴であるが、それはイスタンブールにおいても例外ではないといえるであろう。

第三としては、イスラームへ多大な貢献をして聖者となった者が挙げられる。ここにはまず、ある教団に属して（あるいは属さずに）人々に対してイスラーム、さらには神との合一への道を説いていた者が含まれる。彼らのほとんどは小さい頃から教育を受けており、学問を学ぶ機会が与えられていたことから、上層階級の出身であると考えられる。多くの人々に正道などを説き、自身のような人物を輩出していった彼らの知識、行動が聖者性に相当するのではないかと考えられる。このカテゴリーには、スーフィーとして神との合一への道を追求することに人生を捧げた者たちも含まれる。その中には斧を持って街を歩いていたメフメト・カパニー⁸¹や、時のシェイヒュルイスラームのファトワーを受け、12人のムリード⁸²とともに自身の息の根を自ら止め殉教するイスマイル・マシューキー⁸³など、我々の価値観では理解できないような人物も存在する。だが既に述べたように、聖者という概念はもともとスーフィズムから生まれたことを考えると、これらの人物が聖者性を持つことも納得がいく。

上の3点の聖者性に当てはまらなかった者たちは、その他に分類した。ここに分類された聖者として、メフメト2世に仕えた人物（アシュチュ・バシュ⁸⁴など）、または官僚（セル・ヴェリップ・スル・ヴェルメイェン・セルヴェル・デデ⁸⁵）、そして作曲家（ウトリ⁸⁶）などが挙げられる。

聖者性	人数
イスタンブール征服への参加+奇跡	8
イスタンブール征服への参加+イスラームへの貢献	1
奇跡+イスラームへの貢献	20

⁸¹ 159 頁

⁸² 「弟子」を表す用語。

⁸³ 137 頁

⁸⁴ 89 頁

⁸⁵ 195 頁、2 章に掲載。

⁸⁶ 134 頁、2 章に掲載。

次に、聖者性が1つではなく複数見受けられた者たちを見てみよう。聖者性を複数有する聖者は29人掲載されていた。

イスタンブール征服に参加し、奇跡も起こした聖者は8人である。これらの代表的な例は、征服中に土から塩を作り出したトゥズ・ババ、同じく征服中に戦況などを遠方にいるメフメト2世へ一瞬で伝えたと言われるウチ・ギョズリュ・メフメト・エフェンディ⁸⁷であろう。この2人のように、征服中に勝利へ貢献する奇跡を起こした者がほとんどであった。

イスタンブール征服に参加し、イスラームへも貢献した聖者は、モッラ・ギュラニー⁸⁸の1例のみであった。この人物はオスマン朝における第4番目のシェイヒュルイスラームであり、イスタンブール征服では兵士たちの士気を高めたとされる人物である。軍隊においてある程度の功績を残しながら、学問を修めることの難しさが、この結果から分かるのではないだろうか。さらに、この征服に参加してシャヒードとなった者が多いことから、聖者性の要素であるこの2つを同時に有することは稀なことであることが窺い知れる。

聖者性としてシャイフやハリーフア職、またはスーフィズムの道を進みながら奇跡も起こしたと言われる聖者は比較的多いと言える。これも、スーフィズムに端を発する聖者信仰という側面から考えると当然の結果であろう。

⁸⁷ 214 頁

⁸⁸ 168 頁、2 章に掲載。

第二章 イスタンブールにおける聖者の聖者性

第一章では統計をとり、5つの観点から分析を加えた。ここでは、先で触れた聖者性について、より詳細に見ていくことにする。イスタンブールの聖者性が3つの範疇に区別することができることは先に述べた通りであるが、具体的な聖者たちの人物像を知るため、本章では『イスタンブールの聖者と征服の殉教者たち』の聖者のうち、15例を翻訳し、掲載していく。

1. イスタンブール征服への参加

『イスタンブールの聖者と征服の殉教者たち』に掲載されている聖者のうち、約41%がイスタンブール征服に参加していた。さて、ここではこのイスタンブールに特有な聖者たちが征服においてどのような活躍を見せていたのか、その聖者性の所在はどの点にあるのか、詳細に見ていくことにする。シャヒードとなったエレクトリ・ババ、我々の観点からでは到底理解のできない行動を見せたホロズ・ババ、奇跡を見せ征服に貢献したトゥズ・ババ、そして今日、征服とは無関係の崇拜を受けているテリ・ババの4人を本節に掲載する。

(a) エレクトリ・ババ⁸⁹

メフメト 2 世のイスタンブール征服に参加したこの人物は、「幸福な軍人」の1人であると考えられている。名を、ムスリフッディンという。エレクトリ・ババ⁹⁰として有名である。以前は木造の墓があったが、ろうそくの火が原因で火事になってしまい、その後簡素なものが新しく建てられた。人々はこの墓へと、ふるいを持参して訪れる。

彼はイスタンブール征服において大きな活躍を見せ、スィリヴリカプまで辿り着くことができた。その時には、

「軍人たちがふるいに掛けられたが、ようやくここまで辿り着くことができ

⁸⁹ 114 頁

⁹⁰ 名の“Elek”は、ふるいを意味する。

た。」

と話したとされている。だが彼の盾はここに辿り着くまでに、ふるいのように穴だらけになってしまっていた。その穴を矢が通り抜け、彼に刺さってしまい、現在墓のある場所でシャヒードとなったのであった。碑文には、

メフメト 2 世の旗手であり、神の慈悲の下にいるエレックリ・ムスリフ
ッディン様の魂に平安を ヒジュラ暦 857 年⁹¹

と書かれている。墓は、スイリヴリカプの城壁外に位置しているが、現在荒廃している。

(b) ホロズ・ババ⁹²

彼はイスタンブール征服に参加した「幸福な」ガーズィーの 1 人である。名をメフメト・エフェンディという。スーフイーでもあり、アフメト・ヤセヴィの弟子であった。ハジ・ベクタシュ⁹³とともにホラサン⁹⁴からイスタンブールに向かう途中で征服軍と合流し、イスタンブールへと入った。そしてウンカパヌのアヤカプの一角でシャヒードとなり、そこに埋葬された。墓の向かいの城壁には目印として雄鶏の絵が描かれたらしいが、私⁹⁵はそれを見つけることができなかった。征服軍と共にイスタンブールへ向かっている際、礼拝時間になると必ず雄鶏のような鳴き声を上げていた。「なぜそのような鳴き声を上げるのですか」と尋ねるものに対しては、

「目を覚ますのだ…不注意な者たちよ…」と返答していたらしい。

このため彼はホロズ・ババという名で有名になったのである。

⁹¹ 西暦 1453 年。

⁹² 128 頁

⁹³ 14 世紀に生きた、ベクタシー教団の創設者。

⁹⁴ トルコ東部エルズルムにおける一都市。

⁹⁵ 著者である Şevket Gürel の一人称。

(c) トゥズ・ババ

彼は、メフメト 2 世の塩配給長である。偉大な聖者の 1 人であり、トゥズ・ババとして名を馳せた。

ベシクタシュ、ウズンジャ・オヴァ大通りには、聖なるトゥズ・ババモスクがある。このモスクの入り口から見て右側の、大通りに向けて 3 枚の窓が張られた廟に彼は眠っている。廟の大通り側の壁には、セリム 3 世⁹⁶によって設置された噴水が今でもある。その噴水には塩が盛られてあり、人々はこの塩を邪視除けに効果があるとして持ち帰る。モスクの入り口には祈りのための窓があり、廟は非常に清潔でよく手入れされている。また、彼の足元には、彼が塩を作る際に使用していた石臼が、今でも佇んでいる。

トゥズ・ババはイスタンブール征服に参加した「幸福な」聖者の 1 人である。イスタンブール包囲の際に、兵士たちの食事に入れる塩が尽きてしまい、軍隊の幹部が焦って集合するという事態になった。彼らがこの塩の問題について意気消沈しながら話し合っていると、トゥズ・ババが突然彼らの元に現れ、

「軍隊の塩を私がなんとかしましょう」と言った。

そこに居合わせた者たちは驚きのあまり顔を見合わせていたが、彼の決心は変わらず、

「あなた方は興奮なさないでください。私があなた方に今、塩をお持ちします。あなた方はその許可を出していただければよいのです」と言う。

「それでは許可しましょう。」

「それでしたら私に、石臼を持ってきてください。」

そこで見事な石臼が持ってこられ、テントの中心に置かれた。彼は石臼を胸に抱え、地面から土を取り臼の中に入れると、その土を全力でひき始めた。彼がひく度に土の色は小麦粉や塩のように変わっていき、ついには水晶のように真っ白な塩になったのである。

この不可思議な作業は、征服のその日まで続いたのであった。

ルファーイー教団に属するこの気高い男の奇跡は、メフメト 2 世の耳にも届くこととなった。偉大な皇帝はこの男のことが非常に気になり、彼を御前へ呼び、

「名はなんと申す」と尋ねた。

「ハリル・スルタン⁹⁷と申します。」

「それではお前は今から、塩配給長だ。さあ行っていつものように塩を作る

⁹⁶ 18～19 世紀に生きた、オスマン帝国第 28 代スルタン。

⁹⁷ トゥズ・ババの本名。

のだ。軍隊はお前が塩を作るのを待っているぞ。」

征服後は今廟のある場所で、人生の終わりを迎えるまでズィクルや神への感謝をして過ごしていた。息を引き取ると、彼が生前とても愛していた、今の廟のある場所に埋葬された。願いをかなえ、病気を治癒させるトゥズ・ババの墓は今日、参詣者で溢れている。

(d) テッリ・ババ

墓は、サルイェルからカヴァックラルへ向かう際に、通りの右側にある。

テッリ・ババはイスタンブール征服のガーズィー⁹⁸の一人で、征服においてはボスフォラス地域の偵察兵であった。しかし彼がどのような人物であったかは知られていない。テッリ・ババは、純白のウェディングドレスに身を包んで結婚したいと望む女性たちの聖者であり、運命を探し求めている者たちにとって望みの門なのである。

イスタンブールで毎日どれだけの女性が花嫁となっているのであろうか。その数がどれだけであっても、それらの花嫁が着用していたベールから女性たちが糸を引き抜き、その花嫁たちの糸を必ずサルイェルのテッリ・ババ廟に結びつけるという慣習がある。結婚した友人の寛大さを喜びながら、「次は私の番になりますように」と言って引き抜いた花嫁の糸をテッリ・ババのところへと持ってきた若い女性たちは、「幸運が私のもとへ降りてきますように」と望んで糸を結びつけるのだ。

それから短期間でその女性が花嫁となった際には、結婚式が行われるまでにテッリ・ババ廟へと向かい、祈りを捧げて感謝の意を表明するのである。

神の慈悲のもとにある大理石商のハサン・ユルマズによって修理されたテッリ・ババ廟は、毎日老若男女のムスリムで溢れかえっている。

アクサライ、チャクルアー地区のチャクルアー・メスジッド内にもテッリ・デデという他の聖者の廟が存在している。

⁹⁸ 「信仰戦士」の意味で、イスラム世界の辺境を防衛し、異教徒に対する襲撃に従事する人々を指す。

2. 奇跡

第一章で挙げたように、この都市の聖者が起こした奇跡には、予言や物質の変換、夢におけるムハンマドからのお告げ、空間の移動、病気の治癒や死後の奇跡などがある。ここではその具体的な事例として、読心の奇跡を見せたヘルヴァイー・ヤクーブ・エフェンディ、死後に空間を移動し聖者となったカティップ・スィナン、死後の奇跡を起こしたロフサ・スルタン、最後に異教徒からの陰謀を見抜き、触れずして宝石を砕いたミーマール・シナンの4人を見ていこう。

(a) ヘルヴァイー・ヤクーブ・エフェンディ

バイラミー教団の分派であるメラミー教団の偉大な人物であるピル・アリ・アクサライーのハリーフアである。ヘルヴァージュ・ババ⁹⁹はスレイマン1世の時代の人物で、名はヤクーブであると記録されている。

メラミー教団の偉大な人物であるヘルヴァイー・ヤクーブ・エフェンディは神への愛、そして神との合一への情熱を持ち、ニーデのアクサライへ行き、ピル・アリ・アクサライーの弟子となった。

ヘルヴァージュ・ババは、ルメリヒサルに埋葬されているイスマイル・マシューキーとともに、信仰上の問題からウラマーによって罪人とみなされた。ミラーミー教団の偉大な人物イスマイル・マシューキーはスルタンアフメット広場で死刑に処され、ヘルヴァイー・ヤクーブ・エフェンディはイスラエルのアッコへと追放された。その後アッコから恩赦によって解放されたヤクーブは、再びイスタンブールを訪れ、スルタンの恩寵にあずかった。スルタンは現在のヴェズネジレル・ボズドアン・ケメリ 51 番地の彼の墓のある場所に、彼の部屋を設けるほどであった。

ある日、スレイマン 1 世がヤクーブのもとを訪れた。座って話していると、スレイマン 1 世はヘルヴァを非常に食べたくなった。「ああヘルヴァがあれば食べるのだが。食べたくて仕方がない」と考えていると、ヤクーブが静かに立ち上がり、「少し待っていてください」と言い残し外へと出て行った。「立法者」は間もなく、ヘルヴァージュ・ババが湯気の出たヘルヴァを持って部屋に入って

⁹⁹ ヘルヴァイー・ヤクーブ・エフェンディはこう呼ばれていた。

きたのを見て、喜びと恥の間で感情が揺れ動き、どうすればと困惑するのであった。

この出来事の後ヤクープの名は、ヘルヴァイー・ヤクープ・エフェンディとして知られることとなる。

ヴェズネジレル・ボズドアン・ケメリ 51 番地にある彼の墓は、非常に荒廃している。隣には、2 人の男性、1 人の女性の墓もある。碑文には以下のように書かれている。

ヘルヴァイー・ヤクープ・ババ様の魂に神の慈悲が訪れることを祈る
没年：ヒジュラ暦 997 年¹⁰⁰

(b) カティップ・スイナン¹⁰¹

イスタンブール、ベヤズッド・ソアンアナ地区の、チョバン・チャヴシュ・マドラサ通りとスンビュル・スイナン通りの間にとっても魅力的なモスクがある。このモスクがカティップ・スイナン・モスクである。このモスクを建てたカティップ・スイナンは、誰からも愛されていた。さらに、困っている人は見逃せず、気前のよい人物であり、何よりも神に愛されながら生きた聖者であった。彼はモスクが開かれてからしばらくでその生涯を終えてしまい、同モスクの庭に埋葬された。

埋葬された夜、カティップ・スイナンの棺は墓からひとりで抜け出し、生前自身が非常に尽力していたモスクのドームの上で留まった。朝になりモスクの職員や会衆は、棺がドームの上にあるのを見ると驚愕した。職員と会衆はドームの上の棺をモスクの庭にある墓へ埋め直すことにした。だが翌朝、礼拝をしようとモスクに集まった会衆は、再び墓からモスクのドームへと移っている棺を見て、もう一度墓へと埋め直さなければならなくなったのである。カティップ・スイナンの棺はその夜もまたモスクのドームへと登り、同じ場所で落ち着くのであった。

この地区の住民たちは、彼の聖性と、もはや自身たちにはなす術のないことを悟った。そしてカティップ・スイナンがモスクのドームで眠ることを望んでおり、この出来事が彼の奇跡であると受け入れられたのである。この 1496 年¹⁰²

¹⁰⁰ 西暦 1588 年。

¹⁰¹ 149 頁

¹⁰² カティップ・スイナンはこの年に死去した。

以来、聖なる棺はドームに設置され、モスクの庭にある墓は空となっている。ドームの聖者として知られているこの聖者は、ここを歩き交う人々を驚かせ、人々は警告のまなざしでコーランの第一章を読誦するのである、聖なる光の中で眠ってくださいと。この青いドームの下を、どのような人々が通り過ぎているのだろうか…。

信心をもって考えてみなさい。あなたは何を見るのか、何を…。¹⁰³

(c) ロフサ・スルタン

我々の美しいイスタンブールにおける、女性聖者の1人がロフサ・スルタンである。

ロフサはスルタンの娘であり、子どもを産むことなく死去した。子どものない女性たちが彼女の墓を訪れ願を掛けると、すぐにその願いが実現する。

イスタンブールにはいつの時代にも、外見が美しいウラマーと、内面の美しいウラマーが存在する。この時代¹⁰⁴にはその声、その話には誰もが惹きつけられ、同時に、性格と外見の美しさが有名なイマームがいた。他の若い女性たち同様、時のスルタンの娘もこの若いイマームに恋をし、男も彼女を愛した。

ある日、素晴らしい人間であるこのイマームに何かが起こったのか、彼は話も、人と会うこともしなくなかった。男の母親はこの状態を非常に悲しんだ。彼女は息子に対し、彼の悩みを話してほしいと頼んだ。彼は

「僕のかい？僕の悩みは宮殿にある。もし僕の苦しみを解決したいのなら、スルタンのところに行って娘を僕にくれるように頼んでくれ。説教をしている時に彼女を見たんだ。僕たちは愛し合っているんだ」と話した。

彼の母は恐れながらも宮殿へと向かった。息子の望みをスルタンに伝えた。スルタンは憤激し「なんて身の程を知らない奴なのだ、その男は」と叫んだ。しかし母は懇願し続けた。

スルタンは「ラバ 40 頭分の金を持ってきたら、娘をやろう」と言った。母がこの要求を息子に伝えると、ヨセフのように美しい人間であるイマームは早速立ち上がり、まっすぐ庭へと向かった。そして庭の土を 40 頭のラバに載せ、

¹⁰³ 『イスタンブールの聖者と征服の殉教者たち』にはこのように、読者に対する訓戒などもしばしば見られる。

¹⁰⁴ ロフサ・スルタンの生没年や、この時代については記述がなかったため、不明である。

宮殿へと持っていくと、袋の中からはぴかぴかの金が出てきたのだ。

スルタンはこれを受けて娘を授けざるを得なくなった。授けざるを得なくなったのだが、

「貴様は私を心の底から怒らせたのだ。私はこの結婚を決して許しはしない。貴様は私に子を失わせる苦しみを与えたのだ。神も貴様に同じ苦しみを与えるだろう」と呪いをかけた。この呪いが原因で、この2人には何年も子どもが授からなかった。

ある日この夫婦は、ハッジに行きカアバで祈ればその願いが叶うだろうと信じ、2人でカアバに行きアッラーに祈願しようと決意した。だが道中で、ロフサ・スルタンが病にかかったこと、そしてなんと妊娠していることが明らかになったのだ。2人は喜びの涙を流し、家路に着いた。この病気から彼女を救うことはできず、数日後に息を引き取った。

時折妻の墓を訪れていた夫はある日、墓の中から赤ちゃんの声がするのを聞いた。

これを受けて彼は墓を開け始めた。若い妻の遺体はまるで生きているようで、腐敗など全くしていなかった。さらには彼女の乳を吸っている赤ちゃんが。

これがロフサ・スルタンだ…。

(d) ミーマール・シナン

自身の手を用いて働くものは労働者、手と知性を用いて働く者は職人、そして、手、知性、そして心を用いて働く者は芸術家である。

建築史における一番の巨匠がミーマール・シナンだ。芸術家たちの聖者である。彼はカイセリ近郊のアウルナス村で生まれた。セリム1世¹⁰⁵の時代にイスタンブールを訪れ、イエニチェリに入隊し、イランやエジプト遠征に参加した。すなわち、イランとエジプトの芸術を、現地で学ぶ機会を得ていたということである。当初は軍事建築を学んでいた。その後、スレイマン1世¹⁰⁶のベルグラード、モハーチ遠征にも参加した。

ミーマール・シナンはその建築家人生の緊要な部分を、遠征軍において、橋や軍事建造物の建築に費やした。その後宮廷建築家に任命され、さらに後になると、彼の人生で最も重要である大作をイスタンブールで作り出すことになる。

¹⁰⁵ 15～16世紀に生きたオスマン帝国第9代スルタン。

¹⁰⁶ オスマン帝国第10代スルタン “Kanuni”（立法者）と呼ばれている。

偉大なトルコ人ミーマール・シナンの人生は、3つの部分に区別され研究されている。

A—徒弟時代。54歳で「徒弟としての私の作品だ」と彼が話したシェフザーデ・モスクを建て始める。

B—親方の助手時代。「助手としての私の作品だ」と話したスレイマニエ・モスクを建てる。

C—親方時代。「親方としての私の作品」である、エディルネのセリミエ・モスクを1574年に完成させる。

彼の偉大な作品は、その完全な不変性と調和で、何百年もの間、人々に感嘆を与え続けている。

ミーマール・シナンの広範な才能を活かした、非常に大きな計画が完了したときには、73のモスク、49のメスジッド、50のマドラサ、7のコーラン学校、17の無料食堂、6の診療所、7の水道橋、7の橋、27の宮殿、18の隊商宿、5の貯蔵庫、31のハマム、そして18の墓、合計312もの建築を行った。

ミーマール・シナンはトルコ建築史においてだけではなく、技術、芸術という観点から全世界の建築においてその才能が認められた偉大な建築家なのである。

彼は99歳で息を引き取った。現在はスレイマニエ・モスクの後方に自ら建てた素朴で小さな墓に眠っている。

99年という人生で81ものモスク、50のメスジッド、そして莫大な数の貴重な傑作を世に送り出した偉大なミーマール・シナンは我々にとって、珍しい種の芸術家、そして貴重な聖者の1人である。

スレイマニエ・モスクの建設中に起こった、我々を非常に考えさせるような出来事は、この偉大な聖者の奇跡の証拠となっている。

1550年に建設が始まったスレイマニエ・モスクには、様々な政府指導者から非常に高価な贈り物が贈られていた。この中に、ドイツの皇帝シャルケンから、ミフラーブに据え付けてほしいという要望とともに送られてきた、非常に美しく精製された濃い赤色の宝石があった。

建設中のモスクで職人たちが、とても高価な宝石がミフラーブを美しく飾るだろうと喜んでいる一方で、偉大なトルコ人ミーマール・シナンの胸中ではある疑いが芽生えていた。彼が「この思いには理由があるに違いない」と言うと、宝石は真っ二つに割れてしまった。据え付けようと準備していた者たちは驚愕した。美しく作られた「十字架」のシンボルが、宝石の中に入っていたのだ。

神の友である偉大な建築家は宝石を取り、ミフラーブにではなく、噴水のあの中庭への入り口前の地面に設置された。宝石は今でもそこに据えられたまま

である。

時の君主、スレイマン1世はこの出来事を6ヵ月後に聞いた。モスクの開館からしばらくしてイスタンブールを訪れたドイツの大使は、スレイマニエ・モスクに行き、高価な宝石を見たいと望んだ。すると、

「その宝石の場所はミフラーブではありません。地面に設置されました」と言われたのであった。

1988年にはミーマール・シナンの没後400周年を記念して、彼の人生や作品が紹介された。

3. イスラームへの貢献

イスラームへ多大なる貢献をした人物も、聖者として崇拝されることは第一章で見たとおりである。シャイフ、ハリーフアや偉大なスーフイー、ウラマーなどがこのカテゴリーに分類される。本節ではその中でも、ナクシュバンディー教団のハリーフアであるアブデュルフェッタフ・アクリー、メヴレヴィー教団のシャイフ、イスマイル・アンカラヴィ、オスマン帝国第4代シェイヒュルイスラームのモッラ・ギュラニー、そしてセラーミー教団を創立したセラーミー・アリ・エフェンディという4名を見ていくことにする。

(a) アブデュルフェッタフ・アクリー¹⁰⁷

ナクシュバンディー教団に属する偉大な聖者であり、正道を示した人物の筆頭である。弟子たちに正道を説き、宗教的問題をよく知る人物であった。ナクシュバンディー教団の偉大な人物の一人、ハリッド・バーダディーの生徒として常に彼のそばに付き、片時も離れることはなかった。禁忌行為¹⁰⁸や疑いを掛けられるような行動を全くせず、素晴らしい道徳を持つ男で、学問を愛し、人々を正道に導く好例のような人物として知られている。

苦行を非常によく行った。というのは、苦行を行いながらの信仰は、神によってより喜ばれるからである。彼の師であるハリッド・バーダディー（ヒジュラ暦 1242 年没¹⁰⁹）は彼を頻繁に遠い地へと旅をさせていた。彼は訪れた全目的地に徒歩で旅を行い、徒歩で帰った。ハリッド・バーダディーはイスタンブールにいる、時のスルタンにも2度アブデュルフェッタフ・アクリーを送ったが、そこまでの道のりも徒歩なのであった。

アブデュルフェッタフ・アクリーは若くしてハリーフア職に就き、人々へ正道を説くべくイスタンブールを訪れた。師のハリッド・バーダディーの持つ学問の深さ、聖者性の高さは、全世界で知られていた。イスタンブールの人々は彼の聖者性から少しでも多くの利益を得ようと、アブデュルフェッタフ・アクリーの元へと駆けつけた。そのような民衆の心を包み込み、暗闇を明るく照らすような彼は、正道に飢えた者たちにとって人生の泉のような存在となったの

¹⁰⁷ 69 頁

¹⁰⁸ トルコ語の“haram”に当たる。

¹⁰⁹ 西暦 1826 年。

だ。この素晴らしい任務を全うしたこの人物は、ヒジュラ暦 1281 年¹¹⁰に神の世界へと旅立つこととなる。

墓は、ヌル・クユスのゼイネップ・キャミル病院からバーラルバシュへと 150 メートル向かった場所にある。彼の墓は、鉄柵に囲まれている。

(b) イスマイル・アンカラヴィ¹¹¹

イスマイル・アンカラヴィは「注釈者」という名で知られているメヴレヴィー教団の偉大な人物の一人である。「注釈者」という名は、メヴレヴィー教団の開祖ジャラルルッディーン・ルーミー¹¹²によるマスナヴィー詩¹¹³集全 6 巻を、その繊細さから、自分の血肉にすることができたため付けられた。アンカラ出身であり、初等教育はここで受けた。その後バイラミー教団に属しシャイフ職を行っていたが、この時、ある目の病気にかかってしまったのである。コンヤのとある医者をも勧められ、治療のためコンヤを訪れた。そこで盲目の彼の目を治した医者とは、墓に眠っているメヴラーナであった。彼のいたテッケの入り口に顔、そして目を擦り付けるとなんと病気は治り、目が見えるようになったのである。その時シャイフであったブスタン・チェレビーから教わった精神の真髄によっても病気が治癒することとなり、彼はデルヴィーシュとしてここに所属することを決意するのであった。ある期間ここに所属した後、「クレディビ」と呼ばれているガラタ・メヴレヴィー・テッケのシャイフとなる。彼は奇跡、そして精神的な知識をもつ人物であった。

ガラタ・メヴレヴィー・テッケは、1491 年にイスケンデル・パシヤによって建てられたテッケで、初代シャイフはシャイフ・ディヴァーニーである。第二代にセマーイー・メフメト・デデ、三代に同名のメフメト・デデが続く。このテッケは一時期ハルヴェティー教団のテッケとなったが、カスムパシヤ・メヴレヴィー・テッケを建てたスッリー・アブディ・デデがガラタ・メヴレヴィー・テッケのシャイフとして任命され、その後このイスマイル・アンカラヴィがシ

¹¹⁰ 西暦 1865 年。

¹¹¹ 136 頁

¹¹² 彼は尊称として、「メヴラーナ（我らが師）」と呼ばれている。

¹¹³ 民族の歴史や英雄伝、恋愛物語の叙述、神秘主義的・倫理的主張の表現に適した

詩形。(大塚和夫 小杉泰 小松久男 東長靖 羽田正 山内昌之編『岩波 イスラーム辞典』岩波書店、2002、912 頁を参照)

ヤイフ職を受け継いだ。

「注釈者」イスマイル・アンカラヴィは 1631 年に死去し、テッケの入り口にある特別な墓に埋葬された。

イスマイル・アンカラヴィはマスナヴィー詩の注釈の分野において、特別な地位にいる。歴史的に有名な狂信者であるヴァーニー・エフェンディの支配の時代に生きたにも関わらず、彼の敵意やそれによる被害を全く受けなかったことは注目に値する。この狂信者を寄せ付けなかったことは、「注釈者」としての精神的な影響力に起因していると言われている。

彼には 40 以上もの作品がある。

没年は、ヒジュラ暦 1041 年¹¹⁴だ。墓はガラタ・メヴレヴィー・テッケにある。彼は詩などにおいては「ルスヒー」という名を使っていた。

(c) モッラ・ギュラニー

オスマン帝国の第 4 代シェイヒュルイスラームである。名はシェムセッディン・アフメト・イブン・イスマイルという。シリアのギラン町にある村でヒジュラ暦 813 年（西暦 1416）年に生まれた。小さい頃にコーランの章句を暗記し、カイロで教育を修了した。学問を愛していたモッラ・ギュラニーは学問を学ぶべくバグダッド、ダマスカス、ディヤルバクル、ハサンケイフ、そしてカイロに行き、その終わりにはイブン・ハジェル・アスカラニーから免状を授かることとなる。

彼はハッジからの帰途で、モッラ・イエガン¹¹⁵と出会った。そこでモッラ・イエガンは「モッラ・ギュラニーという名を君に授けよう」と言い、ムラト 2 世に紹介したのだ。その日以来彼の人生は色づくこととなる。まずはブルサのマドラサで働き、その後のマニサでは、市長であったシェフザーデ・メフメト（メフメト 2 世）の教師となり、メフメト 2 世を殴る許可と、棍棒を与えられていたという。

イスタンブール征服においては、征服前後で、学問と知識の宝庫であるモッラ・ギュラニーは「幸福な軍人」たちの士気を高めた。

征服後には「大臣になれ」という命令があつたにもかかわらず、「学問が最も高貴なものである」と言ってこれを辞退した。

¹¹⁴ 西暦 1631 年

¹¹⁵ オスマン帝国の第二代シェイヒュルイスラーム。

アラブ人によって「オスマン帝国の大学者」と呼ばれたモッラ・ギュラニーは決して揺るぎない道徳を持ち、名声を追い求めることなく、妥協をしない、この時代の数少ない傑出した人物である。時代を開き、また、時代を閉じたメフメト2世やトルコ人の価値を高めるために彼は奮闘し、他人には決して到達することのできない美徳の中で息を引き取った。

死去を目前にして、借金¹¹⁶を自身の財産から払うこと、葬式の礼拝にはスルタンが出席すること、遺体をしばらく地面で引きずることの3点を促した。18万アクチェの借金は彼の財産から払われ、しばらくの間、マットに寝かされた彼の遺体は墓の側まで引きずられたという。

墓は、フンドウックザーデ、国民大通りにある。

(d) セラーミー・アリ・エフェンディ¹¹⁷

現在は、ウスキュダルのクスクルに自身が建設したテッケのそばで眠っている。セラーミー・アリ・ビン・イルヤスは、アイドウンのメンテシェ町にあるクズヤカ村で生まれた。学問を修了した後、クルクアクチェ・マドラサで教授職を行い、十二島のイスタンキョイにおいてムフティーとなった。

だがタサウウフに対する関心を抑えきれず、彼はムフティー職を辞しザーキルザーデ・アブドゥッラー・エフェンディの弟子となった。修行を終えるとハリファとしてブルサへと派遣され、そこでテッケを建設した。アズィズ・マフムト・ヒュダーイーのテッケでは、2度シャイフとなった。

アズィズ・マフムト・ヒュダーイーは、自身のテッケでシャイフ職を行っていた際、当時のメラミー教団のシャイフの一人、ニヤズィ・ムスリと書簡において一連の宗教的議論を行っていた。その事実に端を発しさまざまな噂が生まれ、アズィズ・マフムト・ヒュダーイーはシャイフ職を辞することとなってしまったのである。

一定の期間をはさんだ後、スルタンに命じられ再びテッケのシャイフとなったアズィズ・マフムト・ヒュダーイーは、その人生を終えるまでこの職を全うした。

セラーミー・アリ・エフェンディは、ウスキュダルのバーラルバシュにテッケとモスクを建設し、アジュバーデムにモスク、そしてクスクルにはテッケを

¹¹⁶ 借金の詳細は明記されていなかった。

¹¹⁷ 194 頁

建設した。バーラルバシュにおいて自らの名を冠した街区を、その地域の役人に寄付し人々へ職を提供するなど、強い慈善の持ち主であった。

セラーミー・アリ・エフェンディによって創設されたセラーミー教団における最も特徴的な点は、修行の際に用いる被り物の装飾品の数が17であることだ。ジェルヴェティー教団においては、これが13となっている。

没年は、「ヒターブ・エレスト」の書によると、ヒジュラ暦1104年¹¹⁸である。彼の墓には、一日中参詣者が絶えない。

¹¹⁸ 西暦 1692 年。

4. その他

『イスタンブールの聖者と征服の殉教者たち』には、以上3つのカテゴリーに分類されない聖者も10例存在する。本節ではその中でも特徴的であった3例を紹介しよう。まず、海軍将官として活躍したバルバロス・ハイレッディン、作曲家のウトリ、役人としてメフメト2世に忠実に働いたセル・ヴェリップ・スル・ヴェルメイェン・セルヴェル・デデの3人である。ここから、多様な人物が聖者となっていることがわかるだろう。

(a) バルバロス・ハイレッディン

彼はトルコで最も偉大な海軍将官である。名をフズル・レイスという。だが、バルバロスとして名を馳せた。その名の由来として「赤髭」という意味のイタリア語”Barbaros”がトルコ語として用いられるようになったとする者もいるが、彼の兄であるババ・オルチと混同された結果、ババ・オルチという名がバルバロスに訛ったためだと主張する者もいる。

宗教、そして政府に対して彼が成し遂げた大きな偉業から、「ハイレッディン」という名も与えられた。

赤いひげが際立っていたため、ヨーロッパ人は彼をバルバロス、つまり「赤髭」と呼んだ。

バルバロスは、ヤクップという名の役人の息子である。ヤクップ・アーはメフメト2世の時代の軍人、そして役人であった。

バルバロスは兄弟のイルヤスと共にロードス近海で航海を行っている際、ロードスの騎士に囚われ、奴隷の身となった。その後一時期ロードスの監獄で奴隷として働いていたが、隙を突いて逃走すると、兄のオルチと合流し、チュニジアで海賊行為を始めた。地中海でジェノバ、ベネチア、フランス、スペインの船舶を配下に入れ、アルジェリア城を手に入れるとここで小政府を作り上げたのである。

その頃、セリム1世がエジプトを征服した。バルバロスは北アフリカにおける情勢を守るため、アルジェリアをオスマン皇帝の支配下に置かせ帰順した。セリム1世も彼に総督の地位を授け、2000人のイエニチェリ軍人と共に、大砲やハーブなどを贈った。

スレイマン1世は王位についた後、彼をイスタンブールに呼び寄せた。バル

バロスは自身が指揮を執る艦隊と共に訪れた。そこには、18 人もの艦長がいた。皇帝は彼を海軍提督に任命し、彼は 13 年間この地位を全うした。ヨーロッパ人との海上での聖戦では彼らを打ちのめし、オスマン艦隊に数え切れないほどの名誉の勝利をもたらした。この海の聖者は 1546 年、73 歳のときイスタンブールで息を引き取った。墓はベシクタシュの港広場にある。

(b) ウトリ

彼は 17 世紀で最も偉大な作曲家である。名をブフリザーデ・ムスタファ・ウトリといい、イスタンブールで生まれた。音楽学の世界では巨匠として扱われている。メフメト 4 世¹¹⁹の時代には、宮廷大学で講師にもなった。その後エキメッキチバシュ礼拝所でイマーム職をし、その隣にある小学校では教諭として働いていた。この礼拝所は現存していない。

ブフリザーデ・ムスタファ・ウトリはメヴレヴィー教団に属する。ウトリの名のもと、詩、ミステリー、さらには韻の入った民謡を作った。宗教的、そして宗教以外のものも含めると 1000 以上もの曲を作曲した有名な我々の誇るべき音楽家である。今日我々のもとには彼の作品が 40 近く残っている。その中でも、犠牲祭の曲が最も有名である。「金曜礼拝」、「集団礼拝」、「メヴレヴィー教団の儀式」、ムハンマドを讃える詩、賛美歌などの彼の作品は何世紀にも渡ってイスラーム世界のモスクで、生き生きと、喜びとともに歌われている。これらは音楽のあらゆる観点から考えて傑作であると言えるだろう。

(c) セル・ヴェリップ・スル・ヴェルメイェン・セルヴェル・デデ

セルヴェル・デデは当時の戸籍局長である。バイラミー教団の分派であるメラミー教団に属していた。税に関する書類、人口、収支のリストなどはすべてこの男が管理していた。これらの種類のうち古いものは、戸籍局書庫に保管され、高官による印章によって封印されており、それが開かれる際にはセレモニーが行われていた。

セルヴェル・デデはこの重要な任務の責任者であった。ある日の深夜、スルタンの側近がセルヴェル・デデからある書類を要求した。だが、セルヴェル・

¹¹⁹ 17 世紀に生きた、オスマン帝国第 19 代スルタン。

デデは「この時間には書類はお渡しできません」と言う。側近たちは「スルタンの命令である」と話すが、彼は「目的なしではお渡しすることはできません」と彼らに書類を渡すことは決してしなかった。

この頃、ある牧草地を巡って2つの村の間で論争が起こり、その結果血を見る争いとなってしまうことになる。スルタンはこの問題を精査するために書類を望んでいたのがあった。

スルタンは、彼の勅令にも首を縦に振らないセルヴェル・デデに対し激昂し、直ちに彼を斬首刑にしろと命令した。

それから間もなく、彼は斬首刑に処されてしまった。

その後大臣たちを宮廷に招待したスルタンは、この出来事を、つまり戸籍局長の傲慢さについて説明した。それを聞いた大臣は、

「スルタン様、夜間に戸籍局や書庫を開くことは、あの偉大なスルタン、メフメト2世の勅令によって禁じられているのです。セルヴェル氏は自身の任務に忠実な方です。そうでないとしたら、あなたの命令を拒絶することなど可能でしょうか」と話した。

スルタンは、任務に忠実だったこの男を不当に死刑に処したことをひどく悲しみ、

「彼を、埋めた場所から出せ。そして彼が非常に愛し、生涯を捧げた書類のあるあの場所へ埋め直せ」と命令した。

翌日、多くの人で混雑した葬式において、セルヴェル・デデを書庫へと埋め直し、以下のような碑文を設けた。

生涯を捧げ、秘密を守り通した¹²⁰セルヴェル・デデの魂の平安を心から
祈る。 ヒジュラ暦 1180 年¹²¹

墓は現在、スルタンアフメット戸籍局の中にある。

¹²⁰ 原文が“Ser verip sır vermeyen”であることから、「自分の人生は与えたが、秘密は与えなかった」という文が原文により忠実であろう。

¹²¹ 西暦 1766 年に当たる。

おわりに

本稿では、イスタンブールにおける聖者たち、そしてその聖者性について見てきた。

男性が 98%以上を占めるこの都市の聖者は、主に 15 世紀から 18 世紀に活躍した人物が多く、タリーカとしてはハルヴェティー教団、バイラミー教団に属していた者が目立った。また聖者廟は、城壁内外の旧市街のものが 80%に迫る割合を見せ、タリーカごとの分布では旧市街のハルヴェティー教団、ガラタ側、アジア側のバイラミー教団という図式が出来上がるなど、聖者の生前の活動地域やタリーカの勢力図などもある程度明らかになったといえる。

聖者概念はスーフイズムに端を発しているが、この都市における聖者は偉大とされるスーフイーや奇跡を起こした人物だけではなく、ガーズィー、学問を追究した者、さらにはメフメト 2 世に仕えた人物や作曲家にまで及ぶなど、大きな広がりを見せていた。

その結果この都市の聖者の聖者性は、大きくイスタンブール征服への参加、奇跡、イスラームへの貢献という 3 つの範疇に分類することができた。その中でも際立っているのが、イスタンブール征服というジハードに参加し、聖者として崇拝されている人物の数の多さであろう。聖者全体の実に 4 割にも及ぶ彼らは、偉大なガーズィー聖者として 500 年以上経過した今日でも強い崇拝の対象となっており、イスタンブールにおいて 1453 年の征服がどれだけ重要な意味を有していたかが伺える。加えて、本稿では対象とならなかったサハーベたちも考慮すると、この都市における聖者のうち、ジハードに参加した人物の割合はさらに大きなものとなるだろう。

長い年月にわたって民間信仰の対象となっている聖者たちは、人々のさまざまな願いを叶えるとされるなど、死後においてもいわば「奇跡」を起こしているということも可能である。ただ、必ずしも彼らの聖者性に沿った祈りが行われているわけではないということも付け加えるべきであろう。

以上の結論を踏まえ、最後に今後の展望について述べてみようと思う。本稿で資料とした『イスタンブールの聖者と征服の殉教者たち』では、生きた時代や教団などについて記述のされていない聖者が多く見られた。よってこれらの点をより詳細に調べ分析する必要があるように感じる。それによって、聖者性につながる情報を現段階以上に得ることができるのではないだろうか。また、彼らの聖者性と崇拝の間にある乖離の原因、すなわち崇拝の対象となっている聖者が、なぜ今日のような願いを叶えるとされているのか調査、研究すること

も有意義なものになるであろう。加えて、イスタンブール征服に参加した聖者が、征服においてどのような役割を果たしていたのかを綿密に研究することで、この都市における聖者の聖者性がより鮮明な形を帯びたものになるだろうと考えている。今後この3点、さらにはそれらに繋がる研究が行われ、この都市の聖者性が完全な形で明らかになることを期待して、本稿を締めくくることとする。

参考文献一覧

私市正年『イスラム聖者 奇跡・予言・癒しの世界』講談社現代新書、1996
赤堀雅幸「スーフイズム・聖者信仰複合への視点」赤堀雅幸・東長靖・堀川徹
編『イスラーム地域研究叢書7 イスラームの神秘主義と聖者信仰』東
京大学出版会、2005.

赤堀雅幸「聖者信仰研究の最前線—人類学を中心に」、赤堀雅幸・東長靖・堀川
徹編『イスラーム地域研究叢書7 イスラームの神秘主義と聖者信仰』
東京大学出版会、2005.

大稔哲也「イスラーム世界の参詣—聖者とスーフイズムを視野に入れつつ—」、
『岩波講座 世界歴史10 イスラーム世界の発展』岩波書店、1999.
大稔哲也「「聖者」と「聖者崇拜」」三浦徹、東長靖、黒木英充編『講座イス
ラーム世界 別巻 イスラーム研究ハンドブック』栄光教育文化研究所、
1995.

大塚和夫 小杉泰 小松久男 東長靖 羽田正 山内昌之編『岩波 イスラ
ーム辞典』岩波書店、2002.

Şevket Gürel, *İstanbul Evliyaları ve Fetih Şehidleri*, İstanbul'daki Tarihi
Türbe ve Mescidleri İmam Vakfı, 1988.

A.Süheyl Ünver, *İstanbul'da Sahabe Kabirleri*, İstanbul Fethi Derneği
Yayımları, 1953.

A.Süheyl Ünver, *İstanbul'un Mutlu Askerleri ve Şehit Olanlar*, Türk Tarih
Kurumu Basımevi, 1976.

Necdet İşli, *İstanbul'da Sahabe Kabir ve Makamları*, Vakıflar Genel
Müdürlüğü ve Türkiye Vakıflar Bankası.

Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi Cilt 6, Tarih Vakfı, 1994.